筒井新聞　第 325 号

6 年半を過ぎた福島第一

1．福島第一視察団

超党派の国会議員でつくる原発ゼロの会は、毎年 12 月初旬に福島第一の事故サイトを訪問して、後始末作業の進捗状況を確認している。今年も 12 月 4 日（月）の構内視察に随行員として参加するようにとの誘いがあった。例年は 10 人余りの団体であったが、今年は立憲民主党が脱原発を政策の柱の一つにしたので、新しい議員さん方も加わって、24 名の大所帯になった。その顔触れは、国会議員 13 名（近藤昭一、逢坂誠二、菅直人、青山雅幸、伊藤俊輔、大河原雅子、菊田真紀子、高井崇志、中谷一馬、日吉雄太、宮川伸、山崎誠、阿部知子のみなさん）、有識者 6 名（阿南久、大島堅一、小峰充史、高橋洋、伴英幸のみなさんと私）、ほかに秘書さん方など 5 名であった。

私は、2015 年 12 月 7 日に参加して以来、2 度目であった[1]。原発サイト外の旅行経過は別稿に記し、ここではサイト内の視察に関する事柄を記す。

2．いわき駅集合から福島第一原発入場まで

午前 9：30 いわき駅集合。前日に泊まったのは、私のほかにもう一人の議員さんだけで、ほかの 22 名の方々は 7：00 上野駅発―9：22 いわき駅着到着。駅の改札口前で点呼。阿部知子議員事務所が手配した 50 人乗りの大型バスに乗車、国道 6 号線を北上して富岡町の旧東電エネルギー館へ移動。車中約 1 時間、自己紹介を順番にしたり、窓外の景色を見たりして、徐々に福島浜通りの雰囲気を思い出していく。この日は快晴で、気温も暖かであった。私自身は自己紹介の折に、事故炉の後始末は放射線量が減衰してから落ち着いて行うべきだという持論を持っていることを述べ、そのことをも書き込んだ新著『原発は終わった』（緑風出版）をみなさんに進呈した。このことは、2 年前の視察の折にも原子力市民委員会の特別レポート 1『100 年以上隔離管理後の後始末』というパンフレットをお配りして、東電にも意見交換の機会をお願いしたのだが果たせなかった経緯がある。

富岡町の旧エネルギー館本館は、6 号線を挟んで富岡警察署と向かい合った位置にある街の中心部の PR センターであったようだが、現在は福島第一への訪問者の受付拠点となっている[2]。福島第一への事故対応前線基地として、2013 年 6 月 30 日までは J ヴィレジ

---

[1] 「福島第一事故サイト視察団」『筒井新聞』第 296 号
https://sites.google.com/site/tsutsuishinbun/2015/296/fukushima-daiichi-jiko-site

[2] 「福島・富岡町　東京電力旧エネルギー館」『産経ニュース』2017 年 1 月 16 日
http://www.sankei.com/region/news/170116/rgn1701160008-n1.html

が使用されていた。そちらは現在サッカー場として再開するために整備中で、19 年 4 月に全面再開の予定だという[3]。

会議室に案内されて、本人確認（運転免許証やパスポートなどとの照合)、福島第一内の現状説明や、視察ルートの説明などを約 50 分間受ける。説明者は、主担当のほかに、福島復興本社の副代表と、ほかに若い職員が 3～4 名立っていた。ここでは視察者を年間 1 万人ほど受け入れているそうである。

3．福島第一構内見学

それが終わってから、11：20～11：40 福島第一構内の入退域管理棟まで、東電のバスで移動。入構手続きをしたのち、7 階の食堂（入構者全員に開放されているセルフサービスの食堂）で、われわれも昼食をいただく。昼食後 30 分ほどをかけてマスク・靴下・軍手・ヘルメット・携帯線量計などの身支度を整えて 13：10 から 70 分間構内をバスで見学。ところどころバスを降りて周辺の事情を聴く。

目玉のひとつは 3 号機の使用済み燃料プールから燃料取り出し用のドームの据付がもう一歩のところまで進捗したこと。

図 1．3 号機使用済み核燃料取り出し用ドームの据付状況

[3] 「J ヴィレッジ復興プロジェクト」福島県
http://www.pref.fukushima.lg.jp/site/portal/list277-1007.html

もうひとつは、凍土壁の全面冷却が始まったばかり。凍土壁は、台風の大雨の時には部分的にシールが破れて地下水が流入したことが報じられたばかりであった[4]。

図 2.　凍土壁ブライン配管。縦方向のブランチの天辺に霜が付いている。

構内では、汚染水タンクが既に 100 万トン分林立し（1000 トンのものが 1000 個）、今後、5 号機と 6 号機の西側の林を整地して、ガレキの置き場を作る予定であるという。フランジ型汚染水タンクを徐々に解体しているが、内面は 10mSv/h の汚染レベルなので、当分構内に保管しておかなければならないようである。その他の解体物も今後大量に発生する。初期のセシウム吸着装置（キュリオンとサリー）の目詰まりしたフィルターは容器ごと交換してキャスク保管ケースに入れて、これも並べてあった。

バスが通過するところの構内の屋外汚染レベル（バス内での測定値）をその所々で教えてもらったが、3 号機西側の道路上で 92μSv/h、2 号機と 3 号機の中間の西側道路上で 85μSv/h、3 号機の北側の道路上で 255μSv/h とかなり高い数値であった。したがって、1 日 8 時間働いたらたちまち年間管理レベル 20mSv/y に達するから、前線で働く人々は 1 日 2 時間程度に制限しているようである。構内には現在 5 千人が毎日入構しているという説明があったが、食堂で会ったのは 100 人くらい、構内で働いている人を見かけたのはほんの 20～30 人程度であった。あまり閑散としているので、ほとんどが午前中に引き上げたのだろうかと思わざるを得なかった。もちろん、そのほかの管理的な仕事についている人たちが大勢おられるだろうが、ほとんど屋内で机に向かっているということなのだろう。放射線のない建設現場は（筆者の経験は、最大 3700 人を擁したイラクのノース・リファイナリー建設現場）、5 千人が毎日 8 時間働いたら、現場の姿は見るみる変わっていく。ここでは現場労働者は 1 日 2 時間程度しか働いていないというのは本当なのであ

[4] 「頼れぬ凍土壁　遠い廃炉」『朝日新聞』2017 年 11 月 26 日

ろう[5]。つまり、5 千人が入構しても、8 時間労働の建設現場と比較すれば、1200～1300 人の建設現場とさして変わらない進捗率しか得られないということである。

また、1～4 基の事故炉の工事の元請会社として、日立と東芝がそれぞれ 2 基ずつ請け負い、土建工事は鹿島・清水など 4 社がそれぞれ 1 基ごとに分担しているという話を聞いた。今まで東電が全体を仕切っているという建前だけが伝わっていて、実際には実務をどういう風に契約し、管理しているのか見当がつかなかったので、いく分理解できるようになった。

4．大方針の決定

現場視察が終わってから、再び東電のバスに乗って富岡町の旧エネルギー本館へ戻り、そこで約 30 分間、東電の説明者と質疑応答の時間があった。私はあらかじめ質問状を提出しておいた。

その場では答えられないから、後日回答するとの返事であった。そして受け取ったのが、末尾に添付した回答書である。予想された通りではあるが、見事にはぐらかされた。

前回（2 年前）も、「中長期ロードマップ」の対案について話し合いを求めたが空振りであった。このようなことを繰り返していれば、目先は穏便にすぎるだろうが、東電の信用が、根底のところで失われるであろう。

5．いわき駅まで

15：45 頃に旧エネルギー本館を後にして、今朝のバスでいわき駅へ戻った。福島第一と 6 号線の間の、発電所敷地のおよそ 5 倍の面積を「中間貯蔵施設用地」に指定して、つい最近 10 月 28 日から、汚染土壌の搬入を開始したことが報じられている[6]。

6 号線沿いには、住民が避難して空き家になっている家が多い中で、真新しい個建ての住宅団地がぽつぽつ目に着くようになった。住民が帰還しない中で廃炉従事者として入ってくる新しい住民を迎える住宅なのであろう。東電社員に限って言えば、廃炉作業で J ヴィレッジを拠点にしていた時期には、その敷地に 1600 人の単身寮を設けていたが、現在は福島第一から 4ｋｍほど離れたところに 750 人の単身寮を昨年設けたという。

バス内ではカメラマンの澤口さんが一人ひとりインタビュー形式で感想を求め、動画を撮ってくださった。

充実感は今一つではあったが、得難いチャンスに同行出来てありがたい経験をさせて

---

[5] プラントの解体や建屋の解体などは、それ自体としてむずかしい仕事ではない。しかし、阻害要因は強い放射線であり、それは時間のたつのを待つしかない。それでわれわれは、原子力市民委員会の特別レポート 1『100 年以上隔離管理後の後始末』改訂版 2017　を 2017 年 12 月に発行した。下記 URL に公開している。
http://www.ccnejapan.com/?p=7900

[6] 「中間貯蔵施設稼働へ」『日本経済新聞』2017 年 10 月 28 日夕刊

いただいた。

（2017 年 12 月 11 日　　哲）

添付資料：「福島第一原子力発電所視察質疑事項への御回答」東京電力